

ソニンケにとってのディアスポラ：アジアへの移動と経済活動の実態

著者	三島 禎子
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	27
号	1
ページ	121-157
発行年	2002-08-20
URL	http://doi.org/10.15021/00004046

ソニンケにとってのディアスポラ —アジアへの移動と経済活動の実態—

三 島 禎 子*

Soninke Diaspora:
Migration to Asia and Economic Activities

Teiko Mishima

本稿はソニンケのアジアへの移動についての報告であるとともに、フランスへの労働移動ゆえに出稼ぎ民として位置づけられてきたソニンケ移民をディアスポラ概念との比較のなかで捉えなおす試みである。

20世紀におけるソニンケの移動は、まず西アフリカの「故郷」から他のアフリカ諸国へ進み、80年代以後、アジアへ拡大した。移動は社会と家族がソニンケ男性に求める文化的な営みであると同時に、生計を立てるための経済的な活動である。また民族集団と「故郷」への強い帰属意識が基盤になっている。

内容は聞き取り調査から得られた移民の移動史の記述を中心とし、そこから移動の行程と経済的な営みの特徴を描き出している。移動先については世界経済のなかでソニンケの経済的な動きを理解することが重要であり、経済活動については帝国主義拡大期以前におけるソニンケの移動の営みとの連続性を考慮する必要がある。その作業を通じてソニンケの移動の全体像をつかむことができると思われる。

The Soninke people have featured in international migration studies since the great movement to France from their “home ground” in West Africa during the latter half of the twentieth century. Their migration was always considered to be the labor migration. That approach overlooked the whole dynamism of Soninke migration.

The Soninke have always had a tradition of migration in their ethnic culture. The migrants still belong to the “home ground” even when they are outside. Migration is an act recommended by family and society in order to

* 国立民族学博物館民族社会研究部

Key Words : Africa, Soninke, international migration, diaspora, economic activity, Asia
キーワード : アフリカ, ソニンケ民族, 国際移動, ディアスポラ, 経済活動, アジア

make a name in society. It is a cultural activity and also a source of economic vitality.

Soninke migration has extended to Asia since the 1980s. This paper reports on their migration tendency. The main source of information is narrative data collected in field researches. Here, I describe the itineraries of their migration and their economic activities in order to compare with the concept of “diaspora”.

1 はじめに—移動する人びとを理解する分析枠	内の移動を経由+②フランスへの出稼ぎを経由)
2 調査の概要	4.5 B.S.氏の移動史 (③留学を経由)
3 移動の概念	4.6 E.D.氏の移動史 (④アジアの先進資本主義国を経由)
3.1 O.C.氏の移動史	4.7 A.F.氏の移動史 (⑤故郷から直接に移動)
3.2 D.B.氏の移動史	
4 アジアへの移動	5 アフリカとアジアをつなぐ「ビジネス」
4.1 西アフリカからアフリカ大陸各地へ	5.1 ソニンケにとっての「ビジネス」
4.2 アフリカ大陸からアジアへ	5.2 「ビジネス」の構造
4.3 M.D.氏の移動史 (①アフリカ大陸内の移動を経由)	5.3 「ビジネス」の規模
4.4 M.C.氏の移動史 (①アフリカ大陸	6 おわりに—ディアスポラ概念との比較において

1 はじめに—移動する人びとを理解する分析枠

本稿はソニンケの人びとのアジア¹⁾への移動に関する報告である。同時に、グローバル化時代における移動が、「移動の民」であり続けてきたソニンケにとっていかなる意味をもつのかを考察するものである。とりわけ従来の研究のなかでは、いわゆる労働移民を念頭においた国際移動という現象のなかでのみ取り上げられてきたソニンケ移民を、より広い意味の移動を包括するディアスポラという概念との比較において捉えなおす試みである。

ソニンケと自称する人びとはマンデ系民族に分類され、父系出自をもとにした階層化された社会を形成する。ソニンケ社会は古代ワガドゥ王国に起源をもつと信じられているが、地図上にその位置を確認することはできず、むしろ西アフリカ最初の王国

であるガーナ帝国に由来するという説が有力である。西アフリカにはガラン、ギジマカ、キング、バクヌ、ガジャガなどのソニンケの王国が繁栄し、13世紀ころに今日にいたるソニンケの居住地が確定したと考えられている (Pollet et Winter 1971: 20-34)。現在のセネガル、マリ、モーリタニアを中心にその近隣の国々に相当する。ソニンケは西アフリカ内陸に定住地をもつ農耕民でありながら、交易を営む商人としての長い歴史をもつ。8～15世紀にはサハラ交易において、アフリカ大陸を東西南北に移動しながら商人として活躍した。

ソニンケ社会への関心は、20世紀初頭からドゥラフォス (Delafosse 1912) やモンテイユ (Monteil 1953) などによる民族誌のなかに現れてくるが、民族の移動史を20世紀以降の移動の歴史も含めて総体的に論じた研究はこれまでなかった。今日の人文社会系研究においては、ソニンケへの関心は労働移民という観点に集中している。フランスでは第二次世界大戦後、経済復興のために多くの労働力を必要とし、ソニンケはそれに応じて半世紀にわたる出稼ぎを続けてきた。70年代にはフランスのアフリカ系移民の70% (Kane et Lericollais 1975: 177-178) がソニンケであったと推計されている。このような背景が、ソニンケに関する研究の方向性を決定したと思われる。したがってドゥラフォスが「きわめて移動性に富んだ旅人、かつ移動民」 (Pollet et Winter 1971: 32) と形容したソニンケの移動については、資本主義世界経済の発展にともなう労働移動という側面だけが強調され、ソニンケにとっての移動の意味について問われることがなかったのである。

数少ない研究を分類すると、研究課題は以下の6点に集約される。まずひとつに、移民の送り出し社会における社会関係や農業システムに注目したものがあげられる (Adames 1985; Weigel 1982)。次に、ソニンケの主要な定住地であるセネガル河流域が国際機関や先進資本主義諸国の援助による農業開発の対象となったことで、同地域では出稼ぎ民を再吸収しうる潜在的な土地として数多くの社会・経済調査がおこなわれた (Crousse et al. 1991; Maiga 1995; Sales-Murdock et al. 1994など)。また、出稼ぎという移動システムを説明しうるソニンケ社会の階層構造や家族形態が考察された (Quiminal 1991; Timera 1996)。そして受け入れ社会の移民問題においては同化しがたい民族集団と認識され、「ソニンケ問題」として論じられている (トッド 1999)。移民研究には分類されないが、ソニンケ社会に関する民族学研究 (Pollet et Winter 1971) と、ソニンケ出身の研究者による口頭伝承をもとにした歴史の記述 (Bathily 1989) がある。これらの研究がセネガル人を含めたフランス語圏研究者によってなされているのに対し、アメリカでは奴隷貿易の研究からソニンケに興味をもったF.マンシュエル

(Manchuelle 1997)の研究がある。マンシュエルが19世紀以降のアフリカ大陸内におけるソニンケの移動について明らかにしたことは、フランスへの労働移民という立場が強調されてきたソニンケの移動について新たな視点を加えた。しかしながら、資本主義世界経済の発展過程に現れてきた労働移動という枠組みのなかでソニンケの移動を論じている点においては、従来の研究の流れをくむものであるといえる。

筆者は、ソニンケが移動の民でありながら定住地をもち続け、いわゆる低開発への取り組みとして移民の共同出資によって農村開発をおこなっていることに関心を抱いてきた。その過程で、移動する人びとを一方向的に移民というカテゴリーのなかで理解しようとするフランスを中心とした移民研究へ大きな疑問をもつようになった。その流れをまとめてみると、次のようになる。

「ソニンケ社会における家族の連帯と規模——出稼ぎをめぐる」(三島 1996)では、拡大家族という家族形態と出稼ぎという生活戦略が相互補完的に成り立っていることを報告した。具体的には、平均的な拡大家族²⁾は4夫婦とその子孫を含む22人から構成され、そのなかに移動中の男性が2人以上いること、それが就業可能男性(15-59歳)の半数に相当することなどを詳述した。拡大家族の生活は、農作業に従事する成人男性と出稼ぎ民の経済的貢献によって成り立っている。しかし移動中すべての男性が職に従事しているとはかぎらず、本来ならば家計の負担となる無職の移民は、ある程度の経済力をもつ拡大家族のなかでこそ許容される存在となっている。そしてそのことがまた将来の経済的な貢献につながり、結果的に拡大家族を存続させていることが明らかになった。

「出稼ぎ労働者と地域社会——セネガル河上流域の変容」(三島 1997)においては、定住地の農村開発のために共同出資をするソニンケ移民について、移動と農村開発の必然性を、ソニンケ社会の歴史的背景と定住地の地域的特性、および家族と社会の連帯という側面から考察した。そこでは、自助努力による農村開発の動きはアフリカ諸社会が抱える今日的な課題への取り組みとして評価されるだけのものではなく、移民が抱く自己実現や上昇志向への願望と、それを阻む伝統的な社会との葛藤のはざままで生まれてきたものであることに言及した。

さらに、「国際移動と地域開発——ソニンケ移民に関する移動の主体性についての考察」(三島 2002)では、移動の主体性に注目しながらソニンケの移動をグローバル化時代の国際移動において位置づけようと試みた。ここで初めて、ソニンケ移民が労働移民として認識され続けてきたことへの疑問を示すとともに、自らの意思で移動する「独立移民」というあり方を提示した。

人文社会系の研究者による研究に一貫しているのは、ソニンケ移民は「南」という地球上の貧しい地域から「北」の発展した地域へ生活の糧を求めて働きに出る恵まれない人びとであり、ソニンケは出身国においても独立国家が展開した開発政策のなかで周縁的なあつかいを受けてきた集団であるという認識である。そしてソニンケ社会は伝統を堅持する階層社会であり、大家族制によって出稼ぎのシステムが成り立ち、同時にそれゆえ受け入れ社会への同化を妨げている特殊な集団であるという理解である。移民研究の立場からのソニンケ移民の理解（三島 2002: 197-202）について繰り返すことはしないが、ここでは国際労働市場への参入という観点のみからソニンケの移動を捉えようとしたことに対する疑問が、従来の研究において一度も提示されなかったことを強調しておきたい。

本稿では、20世紀後半におけるフランス以外のソニンケの移動先と、その中心地域であるアジアにつながるルート、およびソニンケ移民の経済活動に関する報告をおこなう。そのうえで、民族の移動の歴史を狭義の国際移動という枠組みに限定せず、ディアスポラという概念との比較において捉えることで、グローバル化時代のソニンケの移動を理解する試みにつなげたい。ここでは、故地と出身集団に強い帰属意識をもちながら離散している人びととその状態をディアスポラと表現するが、その定義と使われ方などについては後述することにする。なお、本稿で使用する「移民」という用語は、期間の長短に関わらず移動の状態にある人びとを広く意味するものとし、移民研究における国家の枠組みを越えて移動する人びとという概念に限定しない。

2 調査の概要

本調査は、タイ、フランス、セネガルにおいて1999年8月から9月にかけて6週間、タイと中国（香港）において2000年2月に2週間、タイ、インドネシア、中国（香港）において2001年3月に10日間、タイ、フランス、セネガル、マリにおいて2001年8月から9月にかけての1ヵ月間、延べ14週間にわたっておこなわれた。

フランス以外のソニンケの移動先については過去の調査から情報を得ていたので、アジアの数か国はそれにもとづいて選定した。ソニンケ移民が集中しているタイのバンコクでは、セネガルで知り合ったソニンケ移民の知人に会い、その後、移民の会合に出席して調査の目的を説明し、ソニンケ社会の合意を得ることができた。いったんソニンケの移民社会で認められると、あとは次々と新しい接触相手を見つけることが可能になった。タイ以外でも、それぞれの国に滞在する代表的な移民に紹介を受ける

ことによって容易に調査を進めることができた。

調査は、ソニンケ移民へのインタビュー、移民の経済活動に関する参与観察を中心におこなった。インタビューでは質問を定めず、自由に話してもらうことで、個々の移動史を知ることができた。参与観察においては、一日中行動を共にすることで経済活動の内容や規模について把握することができた。使用言語はおもに移民の出身国の公用語であるフランス語であったが、それぞれの移民が経験した過去の移動先によっては英語や日本語という場合もあった。

調査対象は西アフリカ出身のソニンケ移民である。きっかけはセネガル出身のソニンケ移民であったが、結果的にアジア諸国へのソニンケ移民はほとんどがマリ出身者であることが判明した。そのことによって、フランスへの移動が特出しているセネガルのソニンケ社会のみを対象とするよりも、より広くソニンケ移民の移動の実態について情報を得ることができた。また今回の一連の調査では、ソニンケ移民の立場からみた移動に焦点をしばったため、それぞれの受け入れ社会の事情を十分に考慮することはできなかった。とくに受け入れ社会の経済構造や移民政策、入管の統計などは重要な要素であるが、それらの分析は別稿にゆだねることにして、本稿では言及しないことを断っておく。

3 移動の概念

はじめに、セネガルのG村における調査結果から、90年代のソニンケの移動に関する平均的な状況を把握しておきたい。ソニンケの村では男性の80%以上が村外への移動を経験し、その期間は平均14年間におよぶ。おもな移動先はフランスである。村民全体ではおよそ20%の人がつねに不在であり、働き盛りの年齢(35-39歳)の男性では90%が移動中である(三島 1996: 88-91)。

このように移動という行為がきわめて日常的な営みであることから、多くのソニンケ男性は「冒険者」と自称する。冒険者を意味するソニンケ語のサファラナ(safarana)という言葉は富を探しに行く者を表している。また移動には商いという経済行為をとまなうことから、ソニンケは「商人」(diagoundana)であると自認している。ソニンケの移動は何よりもまず外の世界への興味や関心によって引き起こされ、移動の目的が何であれ、男性が成人になるための通過儀礼としての意味をもつ。たとえば婚資は婿自身が用意する必要があり、「富を探しに行く」ために移動することが求められる。またソニンケ社会には個人の名誉と威信を尊び、他人からの尊敬を得ることを美德と

する文化があり、そのためには冒険を経験することが重要である。つまりソニンケ男性は「一旗あげる」(aradiakha mourana) ために移動するのである。「一旗あげる」とはソニンケ語でチャンスを見つける、あるいは富を探すことを意味する。すなわち、移動は社会と家族、そして個人が求める文化的な営みであるといえる。

しかしながら「一旗あげる」ための手段は、一般的には商いであることが多い。そのためには、故郷の外にある異境へ一人で出てゆかなければならない。アラビア語やイスラームを学ぶために留学するソニンケもいるが、この場合の留学は移動の口実であるかのように彼らは最後には商いで成功して帰郷する。したがって、移動は経済的な営みでもある。

さらに重要なのは、ソニンケにとっての移動は必ず行ってもどってくることを意味するという点である。もどる先は家族が待つ故郷であるとともに、西アフリカにソニンケの諸帝国が栄えていた時代から続く「故郷」の村(ndebbe)である。人によっては移動が数年にも10年にもおよぶことがある。あるいはまた異境で生まれて、成人してから初めて「故郷」にもどることもある。そのようなソニンケにとっての「故郷」は自分が生まれた土地ではなく、先祖伝来の土地が残るソニンケの「故郷」をさすのである。口頭伝承では帝国時代にさかのぼってそれぞれの家系の由来が語られ、人びとはそれにもとづいて自分の出自を認識している。「故郷」には必ず同じ出自をもつ血縁者が暮らし、年月や場所によって関係が一時的に隔絶されても、婚姻関係や里子制度によって人びとは強いつながりを維持している。すなわち、移動は民族集団と「故郷」への強い帰属意識に支えられている。

一方、ソニンケの移動が20世紀後半における労働移動という側面から注目を集めていることも事実である。出稼ぎという現象において、ソニンケが民族文化のなかで継承してきた移動の特徴が失われてしまったわけではないが、そこではむしろ非熟練労働者という立場が目立っている。それはソニンケが求める本来の移動のかたちではない。後述するM.D.氏は、「フランスへの出稼ぎはソニンケの歴史のなかでは一時的なものである。私もフランスにいたが、今は大金を積まれても行きたくない。(人に雇われず)自由でいるのがいい」と語る。またO.C.氏の次のことばに代表されるように、多くのソニンケが「ソニンケは決して貧しさゆえに旅に出るのではない」と考えている。貧しさゆえに出稼ぎにゆく労働移民という規定は経済の地域間格差から生じるものであり、今日のソニンケ社会を相対的に貧しい側に位置づけるならば、労働移動の枠組みでソニンケの移動を論じることが重要になってくる。しかし同時に、ソニンケ社会は出稼ぎ以外に生計の手段をもたないほど貧しくはないという主張も、ソニンケ

自身による過剰な評価であるといちがいにいえるものではない³⁾。

ここで、ソニンケの移動の典型的な例を2人の移動史からみてみよう。

3.1 O.C.氏の移動史

私は大学で勉学を続けたかったが、父も家族の誰も応援してくれなかった。父はダカールに家を何軒も所有するような金持ちだが、本を買うお金は出してくれなかった。そのかわりに息子が未知の世界で困難を経験することを望み、息子が望むと望まぬに関わらず本の100倍以上の冒険資金を与えるような人だった。その資金で私は友人と国内で野菜栽培を始めたいと思った。友人には知識があり、私には意欲と資金があった。しかし父の許しを得ることはできず、1997年、航空券と300万セーファー・フラン（60万円相当）をもって旅に出ることになった。

このように、O.C.氏の場合、父の意思で余儀なく移動をすることになった。父をはじめソニンケの社会において認められるために、通過儀礼としての移動を経験する必要があるのである。

私が選んだのはマレーシアである。知人も親類もいなかったが、ビザなしで1ヶ月滞在できると聞いて出発した。国から出てしまえば、あとは何をしようと自分の自由だから、父から渡されたお金を使って大学へ行こうと考えたのだ。でも残念ながら、その年に大学へ入学することはできなかった。そして1ヶ月が過ぎ、別の行き先を探さねばならなくなった。お金も減ってきて、生活のために何かしなければならなかった。マレーシアでソニンケの商人に出会い、自分も商いをやってみようと考えた。そしてタイに行くことにした。

タイは後述するように、アジアにおけるソニンケ移民の拠点である。O.C.氏は冒険資金を自分のために使って自分なりの冒険をしたいと思ったが、結局、ソニンケの民族ネットワークに関わりながら、自然な流れのなかで「一旗あげる」ための移動を求めていったのである。そして、彼が民族と家族への強い帰属意識をもっていることが、次の言葉に見出せる。

バンコクにいるのは、いつか国に帰るためである。ソニンケであるゆえに遠い異郷の地に旅立つことになったが、それは家族や故郷と縁を切って生きることではない。自分も移動を経験しているが、心からそうしたいとは思っていない。ソニンケは決して貧しさゆえに旅に出るのではない。好奇心が強いだけなのだ。

O.C.氏は意識して避けようとしてきたにも関わらず、結果的には、通過儀礼として移動を経験し、「一旗あげる」ために商いを始め、そして再び故郷に帰るというソニ

ンケの移動に特徴的な過程を辿ることになったのである。

3.2 D.B.氏の移動史

D.B.氏の場合、育った環境にすでに移動という営みがあったこと、またそのような環境から抜け出て自分なりの夢を実現しようとした点において、上記のO.C.氏の例とは異なる経験をした。

私は1958年、コンゴ・ブラザビル（以下、コンゴと表記）⁴⁾で生まれた。父母はマリのガジャガ地方の出身で、父は衣類をあつかう商人だった。当時のコンゴでは、白人から商品を仕入れてコンゴ人に売するような商売をしていたのは私の父だけだった。

この時点で、すでにソニンケの移動の特徴が現れている。まずコンゴという場所である。コンゴはマリと同様、当時はフランス植民地であり、植民地間には契約労働者という労働移動のシステムがあった（後述）。西アフリカのソニンケにとって、コンゴはその時代のおもな移動先であり、少なからずのソニンケがコンゴをはじめアフリカ大陸内のフランス植民地へ移動した。このようなシステムが典型的な植民地経済の搾取の構造であったとしても、ソニンケにとってはまず冒険のための移動であった。D.B.氏の父も最初はそのシステムにのって、マリからコンゴへ渡った。出身地のガジャガ地方は代々バチリ家（Bathily）が治めたかつての王国（Bathily 1989）であり、ソニンケの「故郷」の中心である。そして移動先では、商いを伝統とするソニンケの才覚を現して、契約労働者から商人へ転向したと考えられる。

私は7歳のとき父母とともに『故郷』へ帰ったが、兄や従兄弟はコンゴやコートジボアール、ガボンに住んでいた。

このような環境は、幼いD.B.氏に多大な影響を与えた。

私は子供の頃から小遣いをためて飴やタバコを買い、それをばら売りしてちょっとした儲けを得るような商いの真似事をしていた。学校には行っていたが、早く兄たちのように冒険に出たくてたまらなかった。父は望まなかったが、未知なる冒険をしたいという夢を捨てることはできず、とうとう私は村を出た。14歳のときである。最初はセネガルへ行った。誰も知らないタンバクダの街で、女性に雇われて洗濯や料理などの家事労働をした。1ヶ月に1500セーファー・フランをもらった。3、4ヶ月働いて、それからガンビアへ行った。タンバクダで知り合った5人のソニンケと一緒にだった。ガンビアへ行けば落花生生産地で農作業をして1日ごとに給料をもらえるというわさを聞いたのだ。そこでも3、4ヶ月働いて、またセネガルにもどって数ヶ月仕事をした。旅では初めて見ることばかりだった。自分で

稼ぐことがうれしくてたまらなかった。父母と自分のために服を買って村に帰った。村へはコーラの実をお土産にした。

落花生栽培における季節労働者はナビタン (Navetan: 雨季に移動する人びと) と呼ばれ、ソニンケはほかの人びとに先がけて落花生生産地へ移動した。ナビタンとしてのソニンケの移動は19世紀末から始まり、植民地時代後半の落花生生産の最盛期を経て、1960年代まで続いた (David 1980)⁵⁾。

当時の若者はみなコンゴやパリに出て行った。ソニンケはどこへでも行った。16歳のとき、私も兄を頼ってアビジャンへ行った。兄といっても実は従兄弟で、彼は母親を生後すぐに亡くし、私の母に育てられた。だから兄のように思っている。従兄弟はパリで7年間働いて、アビジャンにもどって父親からまかされた商いをしていた。このときも、私の父は自分のそばにいてほしいと言ったが、私はある朝、誰も知らないうちに出発した。父のお金を黙って持ち出した。村からキディラに出て、電車を乗り継いでバマコに着いた。バマコの駅でガジャガ出身のソニンケ男性に出会い、その人にアビジャンに行きたいと話した。その人はわかったと言って、交通費を出してくれた。そしてアビジャンに着いたら、モスクの前でコーラの実を売っているソニンケ女性を訪ねるとその人は教えてくれた。私はパスポートも身分証明書ももっていなかったが、子供だったから問題にならず到着することができた。そして従兄弟のところへ行って事情を説明した。従兄弟は父にお金を返すことが大切だと言い、父に手紙を書いてくれた。2、3ヶ月アビジャンに滞在し、従兄弟からお金をもらって村に帰った。新しいことを知るというのは、その頃の私にとってとても重要なことだった。17歳になって、父にもう一度、アビジャンに行きたいと頼んだ。アビジャンでたくさんソニンケが商売をしているのを見て、自分も勇気を得た。父はニョロへ行ってアラビア語を学べと言ったが、嫌だと答えた。自分でお金を稼ぎたかった。しかしともかくニョロへ出発することになった。3、4ヶ月のあいだそこにいたが、全然おもしろくなく、トラックでカイへ出て、列車に乗り換えてバマコへ、そこからバスに乗ってアビジャンに到着した。従兄弟は父に知らせ、父はもどれと言ってきたが、従兄弟はどっちみちだめだろうと父を説得してくれた。従兄弟は自分のために働く気があるかと聞いたので、もちろんだと承諾した。従兄弟から銀の塊と粉を預かり、私はそれを宝石屋へ持って行って売った。

D.B.氏の育った環境には家族や同年代の仲間の移動が日常的にあり、彼自身もそのなかで自分なりにひとり立ちすることを考えた。そして家族やソニンケの民族ネットワークを利用して、それぞれの土地で商いを学んでいった。

18歳で私はガボンへ旅立った。若いソニンケ男性が建設現場で石工として働いているとうわさを聞いたのだ。従兄弟はまだ若すぎると言って反対した。私の頭のなかには自分で稼ぐということしかなかった。叔父に話すと、自分のお金を稼ぐために苦勞するのだからい

いじゃないかと承諾してくれた。私はガボンという国がアフリカにあることさえ知らなかった。フランスの会社(スワコ)がガボンで働く労働者を募っていた。切符は会社持ちだった。私は名前を書いて応募した。技術がないとだめだと言われたが、何でもやるからと頼んだら、やる気があると見込まれた。毎月の月給が魅力だった。ガボンでは1年半働いた。食費をのぞいて、給料の残りは郵便為替で従兄弟に送った。将来の資金にしたいと思ったのだ。第1回目の送金は5000セーファー・フラン。スペイン人の所長はいじわるだったが、とにかく働いた。病気になっても休まず、料理は自分で作った。女性と付き合うこともなく、酒も飲まなかった。アビジャンにもどると、従兄弟は私が送った為替をとっておいてくれた。白人のもとで銀を買い、市場で商売をした。

ガボンへは自分の父がコンゴへ契約労働者として移動したように、D.B.氏もまた同じ身分になって働きに出かけた。しかしそれまでは、とにかく自分で稼ぎたいという一心から手探りの移動が続いていた。彼にとって大きな転機になったのは、自分が生まれたコンゴという国に行こうと決心したことだった。

アビジャンで自分の稼ぎが得られるようになって数ヵ月後、今度はコンゴへ行ってみようと思った。自分の生まれた国を見てみたかった。まず知人を訪ねてザイール⁶⁾へ入った。1ヵ月半滞在した後、ブラザビルの兄のところへ行った。兄は仲間と一緒に衣類の商売をしていた。フランスから輸入したものをコンゴで売っていた。私は兄のところを下着や服を仕入れて、露天市場で台を出して売った。24歳のとき友人と共同で店を開くことができた。コンゴに来てから4年が経っていた。フランスへ仕入れに行くソニンケ商人からジーンズやシャツなどを買っていたが、ある晩、仕入れのすぐあとで泥棒に入られてすべてを失った。またいちからやり直した。兄に頼んで女性の下着を仕入れ、同じような商品を置いていない遠くの市場へ行行って売った。そして資金がたまったので、今度は一人で店を開いた。26歳だった。その頃、すでにソニンケ商人のなかには香港や台湾に仕入れに行くものが出て、私は彼らから女の子用の衣類を買って販売した。

本稿で述べようとしているアフリカとアジアをつなぐソニンケの経済活動は、D.B.氏の例にみられるように、80年代にすでに始まっていた。そのことは次章で詳述することにして、ここではソニンケの移動の特徴として、D.B.氏が「一旗あげる」ためのきっかけをどのようにつかんだかに注目したい。

私も香港へ行ってみようと思った。兄には無理だと言われたが、やってみなければわからないと押し切って出発した。資金は700万セーファー・フラン(350万円相当)あった。27歳のときである。まずナイジェリアへ行った。ラゴスでは航空券が安い。あるホテルへ行けばソニンケに会えると聞いて出発した。ラゴスは危険だから旅行費用だけを手元において、商売の資金はブリュッセルの友人に送金した。友人に会って600万セーファー・フランをド

ルに換えた。ラゴスで出会ったマリ出身のソニンケと一緒に、ロンドン、ボンベイ経由で香港に到着した。その人は不誠実だという噂を聞いていたので、自分のお金はしっかり持って行ったが、香港では彼が2つの会社を紹介してくれた。そして衣類やおしめカバー、旅行かばんなどを買い、船荷でコンゴに送り出した。当時、ブラザビルではこのような規模で商いをする商人は2、3人しかいなかった。船荷は1ヵ月後に到着し、品物は2、3日で全部売り切れた。86年1月のことである。やっとやるべきことが見つかったと思った。すぐに香港に引き返し、またコンテナに荷物を積めて送り出した。コンゴとマリ、コートジボアールに家を買った。

「やっとやるべきことが見つかった」という言葉は、D.B.氏にとって「一旗あげる」ための移動がやっと実現したことを意味している。その後はいろいろな困難を経験しながらも、香港とコンゴを往復して商いを展開し、89年から香港に滞在している。95年にはコンゴで結婚した妻と幼い子供を香港に呼び寄せた。そのほかの子供たちはマリとセネガルの家族のもとに預けている。「故郷」へは毎年帰っている。このように彼自身と家族の人生をとおして離散と回帰が繰り返される移動もまた、民族集団と家族への強い帰属意識によって成り立っている点において、ソニンケの移動の特徴を示している。

4 アジアへの移動

筆者の調査によると、ソニンケのアジアへの移動がさかんになるのは80年代である⁷⁾。アジアへの移動が確立するまでの時間的、地理的な過程をみるうえで、(1) アフリカ大陸内、(2) アジア地域、(3) アラブ諸国の3地域が重要な通過点になっていると思われる。ソニンケの移動が経済活動を中心に行っていることを踏まえると、ソニンケが移動先として選んだ地域が世界経済の動きのなかでどのような位置をしめているのかという点が明らかにされなければならない。上記の3地域のうち、アラブ諸国への移動はイスラームを学ぶという目的が多かったが、アラブ諸国を経由しながら多くのソニンケがアジアへ辿り着いているため、ここではアフリカ大陸とアジア地域に限定して、世界経済における地域的な特性を概観することにする。

4.1 西アフリカからアフリカ大陸各地へ

上述のD.B.氏の例にみられるように、ソニンケは西アフリカの「故郷」からアフリカ大陸の他地域へ移動している。その数や規模などについての報告はなく、移動の全

体像をつかむことはできないが、筆者の93年の調査によると、セネガル河上流域のG村から移動中の男性の21%がアフリカ大陸内を移動先に選択していたことがわかっている（三島1996:90）。この数字は、第二次世界大戦後の主要な移動先がフランスに傾倒したことを考慮すれば、決して少ない割合ではない。またその後の聞き取り調査から得た情報を総合すると、アフリカ大陸内の移動は長期的な定住型⁸⁾であり移動というよりは移住に近い。しかしながら、やはり移動先の人びとが「故郷」を憶いながら暮らし、人生のある時期には「故郷」にもどってくること、また異境に暮らしながらも「故郷」とは家族ネットワークでつながり交流を保っていることを考慮すると、これは移動というべき性格のものであると考えられる。

アフリカ大陸にソニンケの移動が広がった背景は、奴隷貿易以後の世界経済とアフリカ経済との関連から説明することができる。産業革命を経たヨーロッパ諸国は、19世紀後半になると安い資源と労働力、および市場を求めてアフリカ大陸に進出した⁹⁾。鉱山資源の開発や商品作物の栽培、それらを輸送するためのインフラ整備などに多くのアフリカ人労働者が動員された（Maiga 1995:40-45）。シエラレオネ、アンゴラ、コンゴ・キンシャサ、コンゴ・ブラザビル、ガボンなどでは、金、ダイヤモンド、鉄鉱石などの鉱山資源やヤシ油などが産出され、コートジボアールではカカオのプランテーション、その他の西・中央アフリカではアラビアゴムの栽培が、ヨーロッパ列強による植民地経済を潤していた（ロドネー1978:188-190）。西アフリカのソニンケは、奴隷貿易商から貿易会社に転換したヨーロッパの商社の募集に応じて他地域へ契約労働者として移動した。また前章で述べたナベタンの例では、ソニンケは落花生生産における農業労働者として移動した。

上記の移動先のなかでも、アジアへつながるルートとして両コンゴは重要な位置をしめていたと思われる。コンゴ盆地はヨーロッパ諸国にとって巨大な富の源泉であった。20世紀前半の仏領コンゴは「強制労働の一大供給地」であり、鉄道建設のために連れてこられたアフリカ人労働者は年間、約1万人にのぼった（ロドネー1978:204-205）。19世紀末、当時のベルギー王レオポルドの支配下にあったコンゴ自由国は、セネガルでもコンゴ鉄道建設のために労働者を募集した¹⁰⁾。フランス植民地政府の記録によると、1894年におけるセネガルとガンビアからのコンゴ自由国への契約労働者は301人とされ、その27%がソニンケであり、その半数以上がセネガル河流域の村の出身であった（Manchuelle 1997:106-110）。この数字は一例にすぎないが、少なくとも筆者の聞き取りから得られた情報を裏付ける有力な資料であると考えられる。

コンゴ盆地はアフリカ大陸における経済の中心として資本主義世界経済に取り込まれていった。その過程において活発化した同地域の経済の動きがソニンケ商人の関心を引いたと考えられる。さらに、旧ザイルでは国内紛争¹¹⁾が相次いだことによって経済の変動がはげしく、とくに物価上昇による商品価値の高騰が経済をより活性化させた。今日にいたるまで、旧ザイルはソニンケにとって経済的な魅力に充ちた地域なのである。

契約労働者として移動したソニンケが、移動先においてどのように経済的な活路を切り開いていったのかについては推測に頼る部分が多い。植民地経済においてアフリカ人商人は、ヨーロッパ人をはじめレバノンやシリア系商人¹²⁾などがつくるピラミッドの底辺に置かれていた(ロドネー 1978: 190-191)。それゆえ上述のD.B.氏の例のように、独立当時は「白人から衣類を仕入れてコンゴ人に売るような商売をしているのは父だけだった」というのは当然の状況である。移動先の経済構造のなかで、ソニンケ移民は契約労働者を経てしだいに商人として力をもつ存在に変わっていったのだと考えられる。それはD.B.氏自身がその後コンゴとアジアをつないで商売を展開したことからもうかがい知ることができるが、その経緯や実態の全体像を把握するのは今後の研究課題となる。

一方、マンシュエルの報告によれば、西アフリカからコンゴ自由国へ移動したソニンケは、支配者や名士、イスラームの導師など「貴族」¹³⁾の出自が多い(Manchuelle 1997: 109-112)。そのことから、筆者は同地域からアジアへ移動しているソニンケ移民に「貴族」の出身者が多いことの原因の一端を理解することができた。しかしながら、ソニンケ社会ではサハラ交易の時代から、誰もが身分に関係なく、商いとしての移動も労働移動としての移動も経験してきたといわれている。とくにフランスへの出稼ぎにおいては、誰もが給料という平等な報酬を得ることを経験した。それゆえ「貴族」という社会身分は商いという民族文化を継承するうえで何らかの有利な条件になっているのか、あるいは「貴族」であるゆえに労働よりも商いとしての移動を選択する傾向があるのかなど、身分の違いがグローバル化時代の商いを営むうえでどのような影響をもつのかという点は、今後、個別に検討する必要がある。

4.2 アフリカ大陸からアジアへ

先駆的なソニンケは60年代からアジアへ移動を始め、80年代には民族ネットワークを介して多くのソニンケがあとに続いた。当初のソニンケ移民にとってアジアの玄関は香港であったが、今日、大多数のソニンケ移民が滞在しているのはタイのバンコク

である。筆者の調査では、バンコクにはマリのカイ地域の出身者を中心として700人あまりのソニンケ移民が滞在しているほか、多くのソニンケ商人がフランスやアフリカ各地から商品の仕入れに訪れる。またマレーシアやシンガポールも仕入れの中継地であるが、長期滞在者はいない。インドネシアのジャカルタには数十人のソニンケ移民が滞在している。これらの国々のほか日本や韓国を目指したソニンケもいるが、従事する経済活動の質がおもに非熟練労働者として働く出稼ぎ型であり、アジアでの「ビジネス」（後述）とは性格を異にする。

これらアジア諸国への移動には、情報の伝達が速くなったこと、移動の手段が容易にかつ安価になったことなどグローバル化の影響が大きいことはいうまでもない。同時に、80年代後半から日本でバブル経済が始まり、世界的に円通貨圏の吸引力が強まったことが関係していると考えられる。日本では「ニューカマー」が到来し、アジア地域でも日本や欧米から多額な直接投資がおこなわれ、過剰労働力が急速に吸収された（井口1997: 273-274）。世界銀行の統計¹⁴⁾によると、上記の各国における2000年のGDP年平均成長率は、中国7.9%、韓国8.8%、インドネシア4.8%、タイ4.3%、マレーシア8.3%と、日本のバブル経済期の平均を上回る。

アジアでは80年代に入り中東地域への人の移動が減少し、域内における国際的な人の移動が高まってきた（井口1997: 256-257）傾向があるが、ソニンケの移動は「過剰労働力の吸収」と判断されるものとは性格が異なる。移動にともなう経済活動の実態については次章で述べるが、ソニンケの場合、これら移動先の雇用市場には参入しないので、おもに労働移動を対象とする一般的な国際移動に関する分析は当てはまらなないと考えるのが妥当である。したがって本稿ではアジアにおける全体的な国際移動の動向には留意せずに、ソニンケの移動の概念を中心におきながら、以下の移動ルートを区別する。

①アフリカ大陸内の移動を経由

植民地支配下においてアフリカ経済が世界経済に巻き込まれる過程で、西アフリカの「故郷」からアフリカ大陸内の他地域へ契約労働者として移動し、移動先でアジア製の工業製品をとおしてアジアと接点をもったことによって、アジアへ辿り着いた例。

②フランスへのお出稼ぎを経由

世界大戦以後、フランスの労働力需要に応じて出稼ぎ民として移動した経験が、アジアへの移動につながった例。

③留学を經由（アラブ諸国など）

国家の定めた学校教育を重視しないソニンケ社会では、イスラームを学ぶことが優先される。宗教的な目的でアラブ諸国へ留学したことがきっかけになり、アジアの経済的な活力を見出し、経済活動に転向した例。

④アジアの先進資本主義国を經由

円通貨圏における80年代の経済発展によって、日本や韓国は出稼ぎ先として海外から注目された。しかしながら、移民規制の強い日本はソニンケにとって理想的な移動先とはならず、それが独立した「ビジネス」を開始する契機になった例。

⑤「故郷」から直接

80年代から「ビジネス」を始める人はしだいに増加し、近年では移動を経験したことがない人びとのあいだにもソニンケのネットワークを介して情報が広まった。その結果、「故郷」で直接に情報を得て、アジアへ移動した例。

以下では、聞き取り調査の結果を参照しながら、上記の5ルートの特徴を描き出すことにする。

4.3 M.D.氏の移動史（①アフリカ大陸内の移動を經由）

M.D.氏の場合、アフリカ大陸内の移動を短期間だが家族をとおして深く経験したのちに、やはり家族のネットワークのなかでアジアへの道を見つけ出したケースである。

23歳（82年）のとき、父に呼び寄せられて故郷のマリから旧ザイルへ発った。父は学校教育を受けたことがないが商いを営み、旧ザイルと香港を行ったり来たりしていた。私は父のかわりに旧ザイルに住むことになり、衣類の商いを通じていろいろな経験を積み、初めてお金の価値や商売のおもしろみを知った。家族のつながりというものを知ったのも旧ザイルへ行ってからだった。

すでに述べたように、旧ザイルとその周辺国は豊かな鉱山資源をもつ地域であり、植民地時代からアフリカ大陸内の経済的な中心であった。それに加えて、たびたびの紛争によって経済が活性化されたこともあり、同地域では工業製品の需要が高い。契約労働者を経験したソニンケ、あるいは同地域の状況を聞き知ったソニンケがそのことに注目して、安い商品を求めてアジアへ仕入れに行くことになったと考えられる。M.D.氏の場合、父親がすでに旧ザイルで経済的な基盤をもち、アジアとアフリカ

をつなぐ経済活動を営んでいた。そしてまもなく自分自身もアジアへ移動するようになる。

翌年にはソニンケの知人を頼って香港へ行き、バンコクへも立ち寄った。85年からは香港からバンコクへ拠点を移して商いを始めた。バンコクの方が商品が安く、アフリカで売ったときに利益があがるのだ。私は知人を頼ってバンコクの空港に降り立ち、ホテルをとって電話で知人に連絡を取った。いろいろ人に聞きながら自分には何ができるか探した。

ソニンケ移民は、世界経済の動きを自分が関わるミクロなレベルで把握しながら移動先を選んでいく。最初は一人の移動が次の人の移動を促し、しだいにそれは人づてに広がり、民族ネットワークのなかで既存のルートとして認識されるようになる。民族ネットワークの実体は、たった一人の知人という場合もあるし、家族であることもあるが、特定の人物や集団がまったく存在しないこともある。たとえば「知人を頼る」という場合、多くのソニンケが「誰それがどこそこにいるらしい」といううわさだけを頼りに異国へ出発する。そして空港に着いてからその人物を探すのだが、実際に会えないこともある。しかし、探している途中でほかのソニンケ移民との関わりが生じてものごとが動き始めるため、彼らにとっては「知人を頼る」と同じ結果になる¹⁵⁾。このようなつながりがソニンケの民族ネットワークの実体なのである。M.D.氏も移動先でまずソニンケを探し、そのうち自分もそのなかに取り込まれながらネットワークの構成要素となっていった。したがって、ソニンケのネットワークとは組織の境界がソニンケという条件以外には無限大に延びているような存在であるといえる。一方、いったんその構成メンバーになると、移動先においては同郷人会に所属してさまざまな互助活動¹⁶⁾に参加する。

10年間はマリーに店をもちながら、アフリカとアジアを往復する生活が続いた。その間、兄がキンシャサにいたので、結婚してから2年間は妻と一緒に旧ザイルに住んだが、マリーに数ヶ月、旧ザイルに数ヶ月、そしてバンコクへ行くという生活は変わらなかった。94年にバンコクで店をもつことに成功し、それ以来、ずっと住んでいる。インドネシア、シンガポール、マレーシアなどへも行った。商品が10～15日で全部売れるとうれしい。

次章で述べるように仕入れと販売の規模が大きくなると、アフリカとアジアの往復も滞在型になってゆく。多くのソニンケ商人はアジアに滞在しながら、アフリカでの販売を家族に任せている。しかしながらバンコクでの長期滞在も、次のことばに表れるようにM.D.氏にとっては移動の途上である。

バンコクの次はベトナムに住むかもしれない。最近はやい商品はベトナムから来るから。でも、5年後には故郷に帰りたい。商売は兄弟に任せるよ。マリでの生活は大変かもしれないが自分の故郷をもっと知りたいと思っている。赤ん坊と妻はバンコクにいるけれど、大きくなった子供たちはマリに残してきている。ソニンケの子供は故郷で教育を受けなければならない。バマコには家がある。帰るところがある。バマコの親戚や村の家族は私が面倒をみている。

アフリカ大陸内の移動を経験した後、ソニンケ移民が直接にアジアへ向かった例はかなり多い。コンゴや旧ザイルなどの中央アフリカ地域の国々は、紛争や政情不安のために国家経済は安定していないが、それゆえ市場の需要は高い。同地域はそもそも豊かな天然資源を埋蔵し、アフリカ大陸内だけではなく地球上の他地域からも経済的関心を集めている。アフリカ大陸における経済的な中心がアジアの経済ダイナミズムに敏感に反応して両地域間に経済的交流が生じ、そこにソニンケ商人が入り込んだと考えられる。

4.4 M.C.氏の移動史 (①アフリカ大陸内の移動を経由+②フランスへの出稼ぎを経由)

一人の人物の移動史は、上記で整理した5つのルートのどれかひとつだけに当てはまるという明確なものではないことが多い。M.C.氏の移動史は、フランスへの出稼ぎとアフリカ大陸内の移動を両方とも経験した例である。

私の「故郷」はマリにあるが、家族はガンビアの村に住んでいる。15歳(80年)のとき、一時帰村していた兄に連れられてフランスへ行くことになった。父は私が兄のように出稼ぎに行くことには反対で、コーラン学校でイスラームを学ぶことを望んでいた。兄は自分が弟をサウジアラビアに行かせるからと言って父を説得し、私は兄と一緒にセネガルのダカールへ行った。叔父の家に滞在しながらビザの手続きをした。フランスでは床や窓ガラスの掃除をして働きながら、週末の夜にはフランス語とアラビア語を勉強した。

父親が息子の移動に反対する場合と勧める場合があるが、どちらが優先されているというものではなく、家族のなかでは各人がそれぞれの役割を担うように、家長である父親が息子たちの移動について決定権をもっている。インタビューに応じてくれた在アジアのソニンケ移民の多くが父親は反対したが自分は出てきたと言っていることから、各家族の生活戦略のなかで移動することをあえて求められなかった息子たちがアジアへの活路を見出したのではないかと推測できる。そのきっかけになったのは、前節のM.D.氏の例と同様に、アフリカ大陸の経済の中心地への移動である。

85年、ザンビアに行っていた兄がもどってきて、一緒に旧ザイルへ来いと言うのでフランスを離れることになった。兄の言うことには逆らえない。旧ザイルではルブンバシでマラカイトの商いをした。2年後、兄はルブンバシで仕入れたマラカイトを持ってアメリカへ行った。そしてアメリカから眼鏡や女性が使う人工髪を輸入して、キンシャサで販売した。

鉱山資源の豊かなザンビアや旧ザイルで、多くのソニンケが契約労働者を経て貴金属類の商いを始めたと思われる。同地域で貴金属類を仕入れ、他地域でそれを売り、別のものを仕入れてまた同地域で売るといふ商売である。80年代、仕入先として注目されていたのがアジアである。そしてM.C.氏もアジアへ旅立った。

ソニンケ移民から情報を得て、88年、自分もアジアへ商品の仕入れに出かけるようになった。商品はガンビアとアンゴラへ輸出した。いちばん上の兄はシエラレオネで商いをしていたがうまくいっていなかったため、自分が送る品物をガンビアで売るとを勧めた。5年間はアフリカとアジアを往復しながら、タイや韓国、シンガポール、インドネシアなどで買い付けをしていたが、93年からバンコクに住んでいる。

フランスへの出稼ぎは村の働き盛りの男性がそっくり移動するほど組織化されている。その移動過程において別の移動先を見つけることはほとんどない。M.C.氏の場合、既存の移動ルートにのって安定した生計手段をいったんは確立したが、フランスは移動の出発点にすぎなかった。多くの場合、アフリカとアジアをつなぐ商売の始まりはアフリカ大陸内への移動がきっかけになっているように、M.C.氏も兄の移動を契機としてアジアへ向かった。アジアへ移動するソニンケ移民にとって、フランスへの移動は否定的に捉えられることが多く、ソニンケ男性が経験すべき性格の移動とは異なるという認識がある。別の人は次のように語っている。

バンコクのいいところはみんなが「ビジネス」を行えるところ。賃金労働者ではなく、誰もがパトロンになることができる。身体を酷使しなくていいし、働いた分だけ自分のものになる喜びもある。

4.5 B.S.氏の移動史（③留学を經由）

移動と商売という営みを民族の文化に継承するソニンケにとって、フランス語による学校教育は人生における優先事項ではない。一般的なソニンケの親は子供が机のうえで勉強するより、移動のなかで人生経験を積むことを望むのである。O.C.氏の例でみたとおりである。

その結果、いわゆる知識人や政治家にソニンケ出身者は少ない。しかしながら、近

代化へのあこがれとグローバル化の影響で最低限の教育は必要だというのが、今日の親たちの考え方である。それは国境を越える手続きに読み書き能力が求められるからである。したがって留学のための移動はソニンケにとって例外的なかたちではあるが、ムスリムであるソニンケにとっては、イスラームやアラビア語を学ぶという口実で正当化されている。そしてこのような移動もまた、移動の本来の目的を見失うものではない。

セネガルのワウンデ村の出身。83年に村を出て、ダカールで3年過ごした。当時、パキスタンからイスラームを学ぶために奨学金が出ていて、9人の奨学生と一緒にパキスタンへ発った。パキスタンには5年間滞在し、最初の3年間はイスラームを学び、後の2年間は溶接の見習いをした。その後、マレーシアとパキスタンのあいだを行き来しながら、バンコクを拠点に商いを始めた。村に帰ったのは最初に出発してから9年後だった。

B.S.氏は英語圏での生活経験が長く、英語でインタビューに応じてくれた。セネガルの公用語であるフランス語は得意ではないようだった。

留学が目的のソニンケは全体的には少ない。留学生として旅立ったソニンケにとっても留学は移動のひとつのきっかけであり、知らずのうちにソニンケの本来の移動のかたちを選択している。サウジアラビアや旧ソ連¹⁷⁾に留学したソニンケもいるが、やはり同じような過程を経てアジアに辿り着いている。

留学の背景として考えられるのは、アジアへ移動するソニンケの多くが経済的により恵まれた地位にあるという点である。アジアへの移動がフランスへのいわゆる出稼ぎと異なって20世紀後半の先駆的な移動であることを考慮すると、留学はそれが許される環境にあったという意味において、出発点においてそもそも遊学に近いもの、すなわち冒険のための移動ではなかったかと思われる。

4.6 E.D.氏の移動史（④アジアの先進資本主義国を經由）

タイを拠点として商いを営んでいるソニンケのなかには、日本や韓国などアジアの先進資本主義国に滞在した者もいる¹⁸⁾。中小企業の工場で雇用され、いわゆる出稼ぎを経験したケースである。多くのアフリカ系移民がバブル期に日本を目指した。外交官や政府交換留学生など公的な立場以外の一般人が渡日するようになったのは80年代後半からである。しかし、十分な資金もなくことばも通じないゆえに強制送還されたものが多い。バンコクでは日本へのビザを偽造して仲介料をとる商売があると聞いている。バンコクは夢の国だった日本へ行くための中継地点でもあり、日本や韓国で

働いたのち、あるいは入国や滞在が不可能だったゆえに落ち着いた場所でもある。

E.D.氏は日本語が堪能である。複雑な問題をはらむ日本滞在について、下記のように語ってくれた。

私は69年にガンビアで生まれた。現在、両親はシエラレオネに住んでいる。18歳のときに、ガンビアからナイジェリア経由で旧ザイルへ行った。そこで衣類の商いを始めた。そして2年後、バンコクへ向かった。

ここまでの経緯は、これまでに述べてきたソニンケの例とほとんど相違ない。つまり、アフリカ大陸内で民族ネットワークを介した移動を経験し、アジアへ辿り着いたというルートである。

その後、知人を訪ねて日本に行った。最初は肉屋や印刷工場などいろんなところで働いた。そのうち日本語もできるようになり自動車メーカーに仕事を見つかることができた。95年には日本人の女性と結婚して子供も生まれた。でも妻の家族とうまくいかなくて、妻は滞在許可証の延長に署名してくれなかった。ビザの問題とかいろいろあったから。昨夏また日本に行ってみたけれど、妻がOKを出してくれなかったから入国できなかった。離婚はしていないけれど、妻と娘とはずっと別れて暮らしている。

日本の滞在許可証は1年ごとに更新が必要で、その際、配偶者の署名が求められる。妻がそれを断った背景には、E.D.氏が結婚前に強制送還を受けたという事情が関係している。

日本に来る前に、バンコクでアメリカ人の友人からパスポートをもらった。お金は払っていない。写真だけ換えた。〇〇という名前はそのときのパスポートの名前。自分のパスポートは国に送り返した。オーバーステイになって、日本のイミグレーションに行くと国に帰りたいと言った。そのあいだにガンビアでは政府がかわって、もとのパスポートを延長できなかったので弟の名前でパスポートを作って送ってもらった。警察官に付き添われて成田へ行った。アメリカのパスポートは取り上げられた。

シエラレオネにいる両親といろいろ話したかった。8ヶ月経って、今度は自分の名前のパスポートを取って日本に行った。ほんとはオーバーステイすると1年経たないと再入国できないけれど、私は別のパスポートだったから入国できた。

E.D.氏は4年間付き合った女性から結婚を申し込まれたとき、自分が国籍と名前を偽っていることを打ち明けたそう。彼は正式な書類を整えてから結婚したいと思い、国に帰るために日本の入管に自ら出頭した。

その後、結婚をして子供ももうけたのだが、パスポートをめぐる問題は不法滞在あるいは不法入国などのレッテルを貼られるのに格好な材料だったため、E.D.氏は妻の家族の信用をすっかり落としてしまった。結婚後の滞在期間の延長も、妻の署名なしには不可能であり、彼は子供が1歳になる前に日本で滞在を続けることができなくなってしまった。

子供が生まれて、私にもちゃんとした仕事があった。妻のお母さんも態度が変わって、おめでとう、がんばってと言ってくれた。妻のお兄さんも初めて家に来てくれた。私は自分が男だから一家の長として責任をもってやってゆきたいと思っていた。お母さんやお兄さんもがんばれと言ってくれた。問題があれば相談にのると言ってくれた。でも妻には、必要なものがあればお母さんではなく自分に言ってほしかった。30万円の給料でできるだけのことはしたいと思っていた。仕事は1週間毎に夜昼の交代制だったから、自分がいないときは家にお母さんやお姉さんが来ていた。妻は私と話すときはいろんなことを理解してくれるけれど、時間が経つとお母さんの考えに影響されてしまう。子どもの名前も問題になった。ソニンケの子どもだから自分の名字を名乗せたかった。ソニンケにとって父親の姓を名乗るのは重要なこと。でも何回話し合ってもだめだった。妻の家族は私なしで家族というものを考えているのではと思った。

このような成り行きをどのように読み取ったらよいのか、2つの視点がある。ひとつは移民政策の観点からの理解、もうひとつはソニンケとしての移動の観点からの理解である。前者の立場に立てば、E.D.氏の行為は不法という言葉で説明される。後者の立場からみると、ソニンケにとっての国籍の曖昧性が問題になる。国民国家を越えて移動するためにソニンケは自分の国籍をもたなければならないが、「故郷」を憶いながら移動を続けるソニンケにとってパスポートに記載された国籍への帰属意識はあまりない。したがって、そのような意識をもつソニンケにとって、国家の規制が強い日本は、ソニンケの移動を実現するための格好の移動先にはなりえなかった。

現在、E.D.氏はバンコクで「ビジネス」を営んでいる。彼にとってバンコクは日本への中継地点であったが、しだいにバンコクで「自分がパトロンになる」ための経済活動を実現していった。最初は知人のところで下働きをしながら、今日では自分の店をもち、「おもしろくてやめられない」というほどに商いは成長した。

4.7 A.F.氏の移動史（⑤故郷から直接に移動）

近年のアジアへの移動は、民族ネットワークが確立して情報の伝達が速くなり「故郷」でアジアの情報を得ることができるようになったために、他地域を経由しない例

が増えてきた。A.F.氏はそのような移民の一人である。

28歳(99年)のときバンコクへ来た。バンコクにはよく知った友人がいて、すでに軌道に乗った商いをしていることを本人から聞いていた。私も行ってみたいと思った。父は大反対だったが、最後にはバンコクにいる友人に自分から電話をすと言った。友人はとにかく来たらいいと言ったが、父は一体いくらあればひと仕事できるのかと彼に訊ね、5000ドルを私に渡してくれた。父はいい加減な冒険には反対だった。今はとりあえず仕事もうまくいっている。でも父は私がやっている商いには興味がないし、兄弟たちも勉強はしたけど机のうえの仕事しかできないから、家族を頼ってセネガルに店を置くようなことは考えていない。

近年のアジアへの移動には、上記の例のようにどのような冒険が可能かについてある程度の情報がある。また、十分な資金をもった人が移動している。その時点ですでに冒険的な要素は弱まっているともいえるが、資金を何倍にも増やさなければならないという義務感があり、誰もが「一旗あげる」ために努力をしている。それはソニンケの移動に欠くことのできない特徴である。

A.F.氏の旅立ちには彼が育った環境が大きく影響している。A.F.氏は20年間、田舎の叔父の家に預けられ、首都ダカールで育った兄弟姉妹とは異なった教育を受けた。田舎とはもちろんソニンケの村である。男性のほとんどが移動を夢見て、実際に村を出てゆくようなところである。そしてまた、離れて暮らした父親の姿も、A.F.氏自身の移動に大きな影響を与えたと思われる。彼の父は、若い頃、友人たちがみな外国へ働きに行ったのに対し、国に残って独力で財を成した人である。その点で、かたちは違うがやはり冒険を経験したといえる。A.F.氏の出発に父親は反対したが、父と同じように「一旗あげた」のは兄弟のなかで彼だけである。A.F.氏が冒険を求め、そこで成功をつかんだことは、ソニンケに特徴的な移動のあり方を現している。

以上、「ビジネス」をおこなうソニンケ移民がアジアに辿り着いたルートを整理し、その特徴を述べてきた。次章では、「ビジネス」の実態について明らかにすることで、ソニンケの移動の本質についての考察へ結びつけたい。

5 アフリカとアジアをつなぐ「ビジネス」

西アフリカ諸都市の市場にはアジアの工業製品があふれている。Tシャツ、ジーンズ、下着、靴などの衣料品、プラスチック製の容器や道具などの生活用品をはじめ、テレビやラジオ、ビデオなどの精密機器、またアフリカ市場向けに作られた人工髪や

アフリカプリント生地などもある。これらの産地はおもに、韓国、シンガポール、中国、タイであり、日本のメーカーの製品を見つけることもある。今日、アフリカにおける消費生活はその多くをアジアという生産地に支えられている。

かつてこれら日常生活品は、おもにヨーロッパ諸国によってアフリカの市場に供給されてきた。アフリカやアジアからは原材料が供給され、ヨーロッパ諸国はそれを加工して工業製品を生産してアフリカ市場へ輸出する。60年代以降は、アジアにおける繊維産業やそのほかの軽工業の発展にともなって、アジアの工業製品がヨーロッパを介してアフリカ市場に供給されるようになった。

この段階において、ヨーロッパの商社にかわってアフリカの商人がアフリカの経済構造の末端から中核へ入り込んできた。個人の移動史にも現れてきたように、まず最初は、アフリカの商人がヨーロッパの商人が輸入する商品を仕入れて、アフリカの市場で販売した。次にヨーロッパへ仕入れに行くアフリカの商人が出現した。この時点ですでに多くのアジアの製品がヨーロッパをとおして輸入されていたと考えられる。そして、生産地がアジアであることに気づいた商人がアジアへ買い付けに行くようになったというのが、アフリカとアジアが直接に「ビジネス」でつながった経緯ではないかと筆者は推測する。

「一旗あげる」ことを可能にする「ビジネス」ということばで語る経済行為は、ソニンケ移民にとって国際的な輸出入をおこなう個人あるいは家族による貿易を意味する。誰もが「パトロンとなる」ことができる個人営業であるが、「ビジネス」はソニンケという民族集団と家族のネットワークのなかでおこなわれる。このような経済行為を、移動手段と情報伝達の迅速さを利用した「20世紀の交易」と表現することもできる。というのは、グローバル化時代において、交易の規模やかたち、移動のスピードや地理的範囲は明らかに拡大したが、移動を文化として営むという点において、「ビジネス」はアフリカ大陸を縦断しながらソニンケが商人として活躍したサハラ交易につながっていると考えられるからである。しかも、個人資本を基盤にしている点も、組織化された企業体がない点においても、サハラ交易のあり方に共通している。

以下においては、「ビジネス」の全体像をつかむために、「ビジネス」の構造と規模について記述する。

5.1 ソニンケにとっての「ビジネス」

ソニンケは「ビジネス」ということばに、さまざまな意味や価値を付加している。このことばを誰が使い始めたのかわからないが、アフリカに住むソニンケも、タイに

いるソニンケも、日本に滞在するソニンケもみな同じ意味で使っている。「ビジネス」はソニンケにとっては母語ではないうえに、出身国の公用語であるフランス語でもない二重の外来語であるが、グローバル化時代の新しい商売のあり方を象徴している。そこには近代的かつ先進的なイメージがある。それは、フランスでの出稼ぎにおいて社会の周辺に位置する移民という立場を与えられてしまったことへの、ソニンケとしての対抗精神の表明であると思われる。すでに述べた「フランスへの出稼ぎはソニンケの歴史のなかでは一時的なものである。私もフランスにいたが、今は大金を積まれても行きたくない。(人に雇われず)自由でいるのがいい」というM.D.氏のことばに表れているように、「ビジネス」によって「惨めな移民」の立場を脱却することができるのである。そしてまた、「ビジネス」は人に雇われずに、自分の能力で切り開いてゆくという可能性をひめている。ソニンケ商人はそこに世界経済の末端に積極的に関わっているという自負心を抱くことができる。

「ビジネス」はまた、サハラ交易の時代から受け継がれている民族文化である。サハラ交易では、ソニンケの帝国から金や、銅、象牙、織布、奴隷などが運び出され、他地域のコーラの実、カリテの油、皮革、鉄砲、ガラス玉、アラビアゴム、馬、塩、織布、酒、奴隷などが持ち込まれた。とくに金は西アフリカの重要な産品であり、北アフリカの岩塩と交換された (Bathily 1989)。ヨーロッパ諸国による植民地支配以前、アフリカはサハラ交易に代表されるような経済構造をもつ独立経済圏を形成していた。8～15世紀、ソニンケは交易人として活躍した歴史をもっている。植民地時代以降、ソニンケの移動は労働移動といわれるものに傾倒したが、それが単なる労働移動に終わらず、今日の「ビジネス」に結びついたことはすでに述べたとおりである。ソニンケ商人は、その時代の需要の傾向をいち早くつかみながら、市場における中心的な商品をあつかう商人として活躍する。ソニンケの移動はいつの時代も経済の中核地点におよび、それぞれの場所において「ビジネス」を展開するという伝統を継承してきた。しかしながら、「ビジネス」にともなう移動は必ずしも経済的利潤だけを求める営みではない。そこには文化的な意義、すなわちソニンケとしてのアイデンティティの証明やソニンケ男性にとっての通過儀礼といった側面があり、それゆえ「ビジネス」は民族文化であるといえる。そのことを考慮せずにソニンケの移動を理解することはできない。

ソニンケにとって「ビジネス」がいかに重要な意味をもつのが、M.B.氏の語りに如実に現れている。彼はマリンに「故郷」をもつコートジボアール国籍のソニンケである。日本の中小企業に勤めているが、自分自身も「ビジネス」をおこなっている。

兄が日本に来ていたから、自分も行ってみようと思った。初めて来たのは1995年。父親が金メッキの装飾品の商いをしていた関係でフランスと取引があり、兄は若い頃から父親を手伝い、世界各地を移動していた。来日するときは父親が50万円相当を持たせてくれた。最初は家賃の仕送りもしてもらっていた。いろいろなアルバイトをしてから、アメリカのコンピュータ会社に就職して2年ほど働いた。その後、その会社は経営不振でアメリカに撤退することになったけれど、私は日本に残った。日本にいたかったんだ。ハローワークへ行って次の仕事を見つけた。そこで見つけたのが今の会社。面接に行くと、社長とその息子さんが気に入った。ソニンケの家族みたいだと思った。アルバムを製造する会社だよ。給料ももらって生活は安定しているけれど、国の家族には内緒。そういう生活はソニンケにとって恥ずかしいこと。だから自分のビジネスもしている。中古車の部品の輸出だよ。休日には関東近辺を車で走って、いろんな業者を訪ねて部品を探す。今、日本では輸出用の中古車が不足している。ラテンアメリカでも需要が高いしね。どこを回ればいいのかわかっていないし、今ではいろんなことが自分でできるから、楽しくてしょうがない。社長の息子と共同で博多に店を出して洋服も売っている。アメリカから衣類を輸入して日本人向けに売ってるんだ。こういうことは家族に誇って言えるけど、給料ももらっているのは恥ずかしくて言えないよ。アビジャンには店を出して、家族に任せてこっちから送ったものを売っている。今年の夏、結婚する。日本に来て7年、30歳になった。ちゃんと稼げるようになったから、やっと結婚できる。婚約者は日本人。とってもいい家族なんだ。でも自分の親にはなかなか言えなかった。ソニンケの男がソニンケ以外の女性と結婚するなんて大スキヤンダルだから。親に言うまでに1年かかったよ。それでも今年の夏には彼女を連れてアフリカへ行った。コートジボアールの両親とマリの家族に会って、みんなに認めてもらった。ほんとに不安だった。将来は、日本とアフリカを行き来できるような生活をしたい。

5.2 「ビジネス」の構造

「ビジネス」は、アジアでは商品の買い付け、生産工場との仲介、輸出代行および輸出、アフリカでは輸入と販売というそれぞれの業務によって成り立つ。商人は商いの規模によってアフリカとアジアを往復したり、アジアに滞在したりする。

非滞在型の商人は、滞在型のソニンケ移民の助けを得て商品の買い付けをおこなう。彼らは現金を持って訪れ、流行のものに目をつけて仕入れをする。それを長年続けて経験を積んだ商人はしだいにバンコクに滞在するようになり、短期で訪れる商人を受け入れる立場の仕事に移ってゆく。滞在型の商人は非滞在型の商人を取引先の卸問屋や工場に引き合わせ仲介料としてマージンを得る。いかに多くの得意先をもっているかが成功の鍵となる。英語やタイ語の理解も重要である。このような仲介業者は自分の店をもち、得意先の工場で生産された商品のサンプルを置いている。同時に輸出入

者への手続きも代行する。輸出業者もまた滞在型の商人であり、事務所を構えている。輸出先は、買い付けに来た商人が生活する国のほか、すでに述べたようなアフリカ大陸内の移動先や家族のネットワークが存在する国々におよぶ。個人規模の「ビジネス」では、届いた商品が売り切れたらまた買い付けに出ることを繰り返しながら、少しずつ資本を増やしてゆく。「ビジネス」が家族で営まれている場合は、アフリカ大陸内に販売ルートと小売店をもちながら、かなり手広く商売を展開している。

「ビジネス」の典型的な進行を、50件余りのデータからより具体的に描き出すと、次のようになる。

移動先はバンコクである。現金をもって初めてバンコクを訪れたソニンケ商人は、まずアフリカ人街にホテルをとり、界隈の店をのぞきながらソニンケの店に入る。店は1人か2人のソニンケが共同で運営しているが、名義上はタイ人がオーナーである場合が多い。オーナーのタイ人は、さまざまな卸問屋や工場とのコネをもっていたり、自分自身が卸問屋であったりする。ソニンケ移民は名義上のオーナーととてもよい協力関係をもち、オーナーが年上の男性であると「パパ」と呼んで親しんでいる。

店にはいろいろな商品のサンプルが置いてあり、客はそれを見ながら注文したり、店主に案内されて市場や工場、問屋街などに行ったりする。需要が高い商品は安価な衣類、装身具、日用品などだが、ラジカセやテレビ、ビデオ、冷蔵庫などの家電製品、またコンピュータや太陽電池などの高額商品をあつかう商人もいる。

1回の買い付け期間は2,3週間だが、数カ国をまわる場合には1,2ヶ月の旅行になる。ジャカルタやシンガポール、香港、クアラルンプールなどに立ち寄って、それぞれの国で仕入れをする。

しだいに店は固定客をもつようになり、定期的に訪れる商人が寄り集まる場所になる。店はそのような人たちに食事やお茶を出したりすることもある。客層はマリ、旧ザイル、ガボン、アンゴラ、コンゴ、パリなどから来るソニンケが中心だが、他のアフリカ系商人やアラブ系の商人も含まれる¹⁹⁾。

店には店主以外に、バンコクに滞在し始めたばかりで自分では店をもてないが、すでに商売のノウハウを身につけ仲介の仕事をするソニンケ移民も出入りしている。彼らは店からは給料と呼ばれるようなものはほとんど手にしていないが、衣食住はソニンケの仲間に助けられながら、仲介手数料で生活している。誰もが携帯電話をもち、店ではひっきりなしに呼び出し音が鳴る。

買い付けを済ませた商人は店で商品が届くのを待つ。商品は数時間から数日で届く。店は個人商人のかわりに立替払いをしてくれるので、商人は商品の代金と輸出手数料

を店で払う。すべて現金取引である。店が輸出業者への取次ぎをしていない場合は、商人は自分で輸出業者へ行く。しかし商品は問屋や工場から直接に届いているので、商人は荷物の確認をするだけである。

輸出業者もやはりバンコクでの経験が長いソニンケ移民である。ここにも、業者に出入りしながら、給料をもらわずに独立して仲介を仕事にしているソニンケ移民がいる。輸出業者を訪れる商人は、初めての街を案内してもらいながら、仕入れの仲介から商品の輸出まで全部を引き受けてくれるソニンケを見つけることができるのである。輸出業者には荷物の梱包やコンテナまでの運送など多様な業務があるため、多くの人員が働いている。

これらの店や輸出業者も、仲介業務をしながら同時に自らも輸出をおこなっている。すでにアジアとアフリカで仕入れと販売のルートを確認しているため、彼らは電話やファックスだけでもものを移動させることができる。アフリカとの時差の関係で彼らの仕事は昼ごろから始まり夜中まで続く。

ソニンケ商人はアジアから商品を輸出したのち、アフリカ各地でそれらを販売する。個人商店に卸す程度から、自分自身が卸問屋となってある地域における販路を掌握したり、数カ国にまたがって販売ネットワークをもったりするなど、販売の規模は輸出する商品の量と家族ネットワークの広がりによって異なってくる。

5.3 「ビジネス」の規模

次に「ビジネス」がどのような経済的規模でおこなわれているのかについて、みてゆくことにする。

多くのアフリカ諸国ではアジアより物価が高いため、ソニンケ商人にとって「ビジネス」は利潤の大きい商いである。たとえば服の仕立て代をみると、タイでは1着1ドル以下で製作することができるが、セネガルでは10ドルはかかる。国際取引における為替レートという面からは、開発途上国に対して世銀が実施した構造調整プログラム下の通過の切り下げが重要な要素になっている。旧フランス植民地の共通通貨であるセーファー・フランが切り下げられたのは93年であったが、ソニンケ移民の多くはそれ以前から外貨を元手に「ビジネス」を繰り広げていたため、ドルを買うためにセーファー・フランを2倍²⁰⁾も払う必要はなかった。また97年のタイ・パーツの切り下げは、すでにドル資本をもっていたソニンケにとっては有利な措置となった。

バンコクで成功しているソニンケ移民の例では、最初の資金は5000ドル程度が一般的である。商品のなかには数十円程度の利益にしかならないものもあるが、ものに

よっては「ビジネス」の儲けは100%以上になる。2、3ドルの商品が関税分を加算して8ドル以上で売れることもある。1回の輸出入で利益が出て、数回のうちに元手は何倍にもなる。コンテナ単位で船荷を送る規模の「ビジネス」では、衣類だけでコンテナを満載した場合、15万～20万ドルの仕入れになるという。

輸出は小包1個から可能であり、最初は小包の単位から「ビジネス」を始める。小包はコンテナに積載されるが、コンテナを満載にするのは輸出業者の仕事である。もちろん、一人でコンテナ単位の貿易をする商人もいる。小包とは、36個で20トンのコンテナ、その倍で40トンのコンテナを満載することができる荷物の単位である。40トンのコンテナ1本あたり、輸送と税関手続きを含めて、バンコクからマリのバマコまで一律1万6千ドル、セネガルのダカールまでは積荷の価値によって2万ドル程度がかかる。

M.D.氏はバンコクで店を経営して仲介と輸出をおこなっている。「ビジネス」は、成功した今では、まずコンテナ1本に2、3種類の商品を積めて手ごたえをみるのが彼のやり方である。荷物はマリや旧ザイルへ送っている。

E.D.氏は輸出業者で下働きをしながら取引先のコネを増やした。今は自分の店もっている。1万ドルあれば、回転資金を含めて店をもてるという。コンテナ1本輸出するのに手数料として1000ドルくらいの稼ぎになる。卸問屋や工場からは仲介料として商品の購入価格の10～20%相当を受け取る。

M.S.氏はセネガル出身であるが、「故郷」はマリにあり、家族がセネガルへ移動してきてからはまだ30年にしかならない。マリでは農業を営んでいたが、セネガルでは商売をしている。韓国に行く目的でアジアに出てきたが、バンコクに滞在するようになって2年が経った。バンコクに着いたときは500ドルしか手持ちの金がなく、2ヶ月もしないうちに全部使い果たしてしまった。しかたなくアフリカから買い付けに来る商人の世話をしているうちに、仲介料で生活ができるようになった。バンコクではドラッグに手を出さずに「ビジネス」をしているかぎり、お金はどんどん儲かるという。お店のオーナーはスリランカ出身の夫と中国出身の妻のタイ人夫婦で、M.S.氏は彼らと一緒に中華街の間屋を歩きながらいろいろな店で顔をつないでもらう。

ソニンケ商人の取引はすべて現金である。ソニンケ移民のなかには100万ドルを身体にくくりつけて持って来るような人もいる。以前は信用取引だったが、今ではタイ人もソニンケのやり方を理解して、現金取引で商品を安く販売するようになった。仲介業者や輸出業者では工場や卸問屋に対して個人商人の立替払いをすることがあるが、それを踏み倒すような商人はいない。信用を失ったらソニンケ社会では生きてい

けないからである。

6 おわりに——ディアスポラ概念との比較において

ソニンケ社会は人口規模からみれば決して大きな集団ではない²¹⁾。それにも関わらずあえてひとつの民族集団としてソニンケ社会に注目する理由は、固有の伝統文化に根ざした営みを繰り返しておこなってきたという特殊性にあるのではなく、ソニンケ社会がつねに外部の世界と連動しているという同時代性にある。その中心にあるのが移動という営みである。移動をソニンケ社会の文化とみなすとき、資本主義世界経済において規定される「周辺」から「中心」への労働移動という枠組みのなかだけではそれを捉えることはできない。たしかにヨーロッパ列強によるアフリカ進出において、ソニンケ社会は植民地経済の搾取の構造に組み込まれていった。たとえ個人が搾取される立場にいなかったとしても、あるいは自発的な行為が搾取と認識されなかったとしても、近代世界システムにおいてアフリカ社会に周辺という位置づけがあったことは筆者も否定しない。しかしながらすでに述べてきたように、ソニンケの労働移民としての移動は時間的には19世紀後半以降に限定され、しかもそのような位置づけがソニンケの人びとによって共有されているわけではない。

では文化としての移動をどのように捉えたらいいのかというのが本稿の課題である。筆者は、近年アジアへ移動するソニンケを「独立移民」²²⁾と表現した。「独立移民」は国境を越えるグローバル化時代の労働移動を考慮しながら、移動がソニンケの民族文化のなかに受け継がれてきた営みであることを示すために使用した用語である(三島2002)。「独立移民」にはソニンケの移動の特質が現れている。ソニンケの男性は社会と家族が課する冒険を通過儀礼として経験する。冒険は一旗あげるための経済活動をとめない、それが成功したとき彼らは「故郷」にもどることができる。その間ずっとソニンケ男性の胸のなかには「故郷」への強い思いがある。故地と帰属集団を基軸にした離散と回帰は個人の生涯において繰り返しおこなわれるとともに、家族と民族のつながりのなかで世代を越えて存続している。そしてこのような移動において、ソニンケは移動先の経済に依存した出稼ぎ民ではなく、独立した経済活動を営む商人として活躍することに、ソニンケが伝統としてきた移動のあり方がある。

このようなソニンケの移動を、時代を区切らずに民族の移動史と文化のなかで捉えようとする試みはいまだなされていない。国際移動や労働移動の枠組みにおいて規定される「移民」は、国民国家を意識した分析上の概念であり、移動する人びと

の総体を表現しているとはいえない。マンシュエルはアフリカ大陸内におけるソニンケの移動に注目した研究者であり、「自発的な移民 (Willing Migrants)」(Manchuelle 1997)と題する著作において、副題に「ソニンケの労働ディアスポラ (Soninke Labor Diasporas)」という表現を用いている。フランスへの労働移民として知られるソニンケを異なる視点から描こうとした著者の意図はくめるが、「労働ディアスポラ」は「労働移動」という用語の置き換えとして使われているにすぎず、新たな枠組みの提示にはいたっていない。

ディアスポラ概念については、定義が明確にされないままさまざまな使われ方が混在しているため、まずその意味を明らかにしておく必要があるだろう。ディアスポラの語源はギリシア語に由来し、種をまき散らすという意味をもつ。オックスフォードやラルースなどの辞典によると、ディアスポラはバビロン幽囚後のユダヤ人がパレスチナ以外の地へ離散したことをさし、世界中に離散したユダヤ人とそのコミュニティを意味し、転じて故地を離れて離散する民族を示すとある。社会科学における今日的な意味のディアスポラは、狭義ではユダヤ人の離散のみを対象としているが、広い意味では以下の5点にまとめられると思われる。第一に故地を離れながらも強い帰属意識をもっている集団、第二には社会現象や個人経験として、故地から離れているという状態、第三に離散の目的地となる空間あるいはそのルート、第四にアイデンティティの構築につながる離散意識、第五に人の移動ではなく個別の文化の拡散があげられる。これらの概念を使いながらディアスポラの研究においては、国民国家におけるナショナリズムやエスニシティの相対化、文化相対主義、多元文化主義、植民地勢力に抵抗するポストモダニズム、国際的な労働移動などが論点として取り上げられてきた。

ソニンケの移動を語る概念として参考になるのが、コーエンの分類するディアスポラである。コーエンは、自分たちの発祥の地から離散しているが「懐かしき国」に強い帰属意識をもち、自分がコミュニティの移民史の延長にある存在であることを認識している集団をディアスポラと定義し、その特徴として以下の9点をあげている。

- (1) 出身国から追放され、精神的外傷をもっている。
- (2) 仕事や交易、あるいは植民地獲得の野心のために発展を求めて出国した。
- (3) 母国に対して共通の記憶、神話をもつ。
- (4) 先祖代々住んでいたとされる想像上の故郷を理想化する。
- (5) 帰還運動をおこなう。

- (6) 強いエスニック集団意識を長年にわたって維持している。
- (7) 移住先社会との関係が良好ではない。
- (8) ほかの国に住む同じエスニック集団の出身者と連帯感がある。
- (9) 寛容な移住先国においてはきわめて創造的で豊かな暮らしが可能である。

そのうえで、中国人やレバノン人の貿易商人あるいは移動商人を「交易ディアスポラ」と分類している。「交易ディアスポラ」では家族や個人に移動の主導権があり、送り出し国と受け入れ国においてマイノリティ集団であるのが特徴である。また移動先では物品を売買する商人として活躍し、同集団出身者の強いネットワークを形成しているとされる（コーエン 2001: 11-12, 141-172, 285-296）。「交易ディアスポラ」の特徴である経済行為に注目すると、いくつかの点を留保する必要があるが、ソニンケの移動もこれに近いものと考えることができる。

最後に、コーエンの定義に依拠しながら、ソニンケの移動をディアスポラという概念との比較において検討することで本稿のまとめにしたい。

ソニンケは商人として移動する文化をもつ集団である。移動はつねに個人や家族、あるいは社会の意思で始まり、帰属集団への強い連帯感によって継続する。そこでは「故郷」を意識した離散と回帰が期間の長短に関わらず繰り返される。

故地から離れているという状態は、時間や距離の隔りを異にしなが、移動する人の個人史と社会全体の民族史の双方に現われる。個人的な体験は社会的な要請によって生じ、再び帰属社会に吸収されることで伝統的な営みとなる。

移動の目的地やルートは、各時代の経済の中核地点とそこにつながる場所におよぶ。とくに20世紀のアフリカ大陸内における移動や一時的な異郷における定住を経て、移動の目的とルートは多様になった。そのことによって、移動は単なる物理的な距離を隔てる行為であるだけでなく、個人、家族、社会、民族のそれぞれのレベルにおいて「故郷」の神話を共有するための行為にもなっている。

アイデンティティの構築という点においては、移動先の習慣や文化から影響を受けて新たなアイデンティティを取得することよりも、移動という通過儀礼を経て社会の正式な一員になり、帰属集団へのアイデンティティを確認することがソニンケにとって重要である。移動という現象は、ソニンケの民族集団への帰属意識を強化している。

ソニンケの文化は、外部と接することによって、伝統的あるいは民族的なものが今日的な脈絡において再選択されていると思われる。それは回顧主義や伝統主義ではない積極的な選択であり、何かに対峙するためのエスニシティの発露とは異なるもので

ある。

このような性格をもつソニンケの移動は、コーエンの定義するディアスポラ、とくに「交易ディアスポラ」の特徴と重なる部分が多い。しかしながら、ソニンケにとっての離散がマイノリティ集団であるゆえの追放という歴史を含有していないことは、コーエンのいうディアスポラと大きく異なる点である。またソニンケの移動は、離散と回帰を繰り返しながら集団内で「完結」している点において、ディアスポラとは性格を異にする。「完結」は移動距離だけではなく、民族意識や経済行為にもおよんでいる。離散と回帰が集団内で「完結」する程度は、情報網や交通手段の発達による時間の短縮や地理的な拡大にもなっており変化しているが、そこには故地と隔絶されているという意識はない。また、ソニンケの民族文化やアイデンティティはソニンケ社会内部で形成され、再生を繰り返している。経済的には「中心」と「周辺」の関係をとときには利用しながらも「中心」に吸収されることなく、ソニンケは各時代において独自の経済領域を築いている。ディアスポラ概念をつねに適用することに慎重であるべきことはいうまでもないが、上記の点を鑑みると、ディアスポラはソニンケの移動を説明する枠組みとしては再考の余地があるといえよう。

本稿ではソニンケのアジアへの移動の最新報告を中心にしたため、いくつかの課題が残されている。第一に時代と地域を限定したこと、第二に移民の受け入れ社会における移民政策と経済構造に関する分析が充分ではないこと、とくにソニンケの移動にもなう経済活動が受け入れ社会の経済構造のなかでどのように評価されるのかという点、第三にアフリカ大陸内の移動の実態について詳細が把握できていないことがあげられる。またこれらの点を補ってゆく過程において、世界史の動きと関連づけて分析することが重要である。そこから本稿の対象範囲内では捉え切れなかったソニンケの移動の全体像が、移動する人びととそれを取り巻く世界という双方の視点によって明らかになり、時代を超えた移動という現象を理解するための枠組みの提示につながると考えている。

謝 辞

本稿のもとになった調査は、平成10～12年度における文部科学省科学研究費補助金「現代アフリカにおける文化運動とエスニシティの文化人類学的研究」(研究代表者・吉田憲司)、平成11年度における同補助金「アラビア半島をめぐるイスラム世界の地域文化形成メカニズムに関する歴史人類学的研究」(研究代表者・西尾哲夫)、および平成12年度と13年度における同補助金「国際移民の自存戦略とトランスナショナル・ネットワークの文化人類学的研究」(研究代表者・庄

司博史)の交付をうけておこなったものである。また国立民族学博物館重点研究「トランス・ボーダー・コンフリクトの研究」(研究代表者・庄司博史)における平成12年2月28～29日に開催されたプレシンポジウム「グローバル時代のトランスボーダーの諸相」において発表した報告をもとにしている。同シンポジウムでは加納弘勝氏(津田塾大学)から貴重なコメントをいただいたほか、参加者の方々からも有益な質問をいただいた。

注

- 1) 本稿で意味する「アジア」は、ソニンケのおもな移動先であるタイ、香港、インドネシア、マレーシアなどの東南アジア諸国、および韓国、日本を含めた地域に限定するものとする。
- 2) ソニンケ社会では、夫婦とその子孫を中心とした生物学的な単位を家族の「核」の基本とするが、「核」にはそのほかの血縁者を含むこともある。ひとつ以上の「核」は「世帯」を形成し、「世帯」は「家族」の屋敷地に同居し、社会的には「家族」に帰属しながら、経済的には「家族」から独立している。しかし、複数の「世帯」の存在は家族の連帯の欠如とみなされるため、「世帯」と「家族」は実質的に同意義である場合が多い。詳しくは(三島1996)を参照。
- 3) セネガルのソニンケ居住地域は内陸に位置し、都市インフラの整備は遅れている。しかし、人びとの生活レベルは衣食住ともに都市並かそれ以上である。それは出稼ぎの恩恵に浴する以上のものであると筆者は考える。その一例に、ソニンケ社会では従来から1日4回の食習慣が守られていること、それに対してソニンケ以外の農村社会や都市のスラムでは1日2回の食事ともめずらしくないことがあげられる。
- 4) 植民地時代の仏領コンゴ、今日のコンゴ共和国をさす。
- 5) セネガル河流域から多くのソニンケが落花生栽培地へ移動し、ガンビアやセネガルの南の地方へ住みついた者もある。ナベタンはソニンケの諸帝国が成立した以後における西アフリカの他地域へのソニンケの広がりを説明する大きな要因である。このことはソニンケの移動の特徴を描き出しているが、本稿の主題であるアジアへの移動には直接につながるものではない。ナベタンの詳細については(David 1980)を参照のこと。
- 6) 1997年にコンゴ民主共和国と改称されたザイールに関しては、ザイールまたは旧ザイールという呼称が人びとのあいだで慣用的に使われている。本稿においては、インタビューの中では語り手が使ったとおりに表記するとともに、本文では煩雑を避けるために基本的に独立以後を旧ザイールとする。なお、それ以前については、時代を考慮したうえで仏領コンゴ、あるいはコンゴ・キンシャサと表記している。
- 7) 本稿では取り上げないが、アジアへの移動とソニンケとの関連を理解するために、いくつか無視することができない視点がある。第一に、それぞれの移動先の経済構造と社会構造のなかで、ソニンケ移民がどのような立場にあるのかという点がある。しかし、本稿で対象にする移動先の国家経済と社会では、ソニンケ移民を特定の集団と規定した統計資料や研究がないために、移動先の国家の枠組みをとおしてソニンケの存在を認識することができない。今後、移民数や経済活動の規模の拡大をみながら、移動先社会からの視点に注意してゆく必要があるだろう。第二に、同じような経済活動を営むほかの移民、とくにアフリカ系移民との比較において、ソニンケ移民はどのような特徴をもっているのかという点が重要である。本稿で注目したような経済活動を目的とした移動はソニンケだけに限られるものではない。アジアへはアフリカ各地から多くの商人が訪れている。国籍もさまざまであり、女性の商人もいる。個人レベルの貿易は、今日のアフリカ諸都市の市場と直結しており、そのようなミクロな経済の動向を理解しようとする研究は、人類学の分野でも現れている。たとえば、セネガルのインフォーマルセクターに信者が広がるマリッド教団のネットワーク(小川1998)や、ガーナやトーゴなどでアフリカプリント生地の商いで活躍する「ナナ・ベンツ(ベンツを手に入れるほど財を成した女性をさす呼称)」と呼ばれるマーケットマミー(Cordonnier 1987)などは、現代アフリカにおける庶民の経済力の出現として注目されている。ソニンケの民族ネットワークを介した移動もそのような一連の動きのなかで捉えることができる。本

- 稿はソニンケの移動に関するケーススタディとして位置づけられる報告であり、そこからソニンケの特徴を描き出すことをねらったものである。将来的には、経済活動に従事するアフリカ系移民との比較においてソニンケ移民を位置づけることにつなげたいと考えている。
- 8) フランスへの移動は同じように長期にわたるが、男性が単身で移動先と故郷を往復する還流型である。
 - 9) 本稿の趣旨であるアジアへの移動には直接結びつかないが、ヨーロッパとアフリカ大陸のあいだを往復した帝国主義拡大期におけるフランス商社の輸送船でも、ソニンケは乗組員として労働に従事した。また、世界大戦においてフランス軍として従軍した歴史もある。
 - 10) ベルギー領で働く労働者をフランス領植民地から募集したことに関して、フランスとベルギーの植民地政府のあいだでは、行政官の個人的なつながりによって何らかの合意が図られた時期もあったが、フランスは1894年以降、反対の姿勢を顕示した (Manchuelle 1997: 106)。
 - 11) ダイヤモンドや金などの輝石や貴金属の取引が紛争における武器供給につながっていることを武内氏は報告している (武内 2001)。ソニンケが紛争地帯へ移動していること、およびソニンケはサハラ交易の時代から金をあつかう商人であり、今日でも貴金属類を取引する商人がいることは知られているが、紛争との関わりについては不明であり、筆者も判断の材料をもっていない。とはいえ、興味深い点である。
 - 12) フランスは政策的に仏領アフリカヘレバノンやシリア系商人を受け入れ、現地の商人の経済力を抑えるような経済構造をつくりあげた。
 - 13) ソニンケ社会は世襲制の社会身分によって階層化され、王家の子孫や支配者、戦士などの「貴族」、鍛冶屋や皮革職人、語り部などの「職人」、そして「捕虜・奴隷」という三つの身分を規定している。
 - 14) <http://www.worldbank.or.jp/06group/RC_flame.htm>による。
 - 15) 筆者が初めてバンコクを訪れたときも、セネガルの知人から紹介を受けたある人物の名前とバンコクの住所だけが頼りだった。その知人とは10年ぶりにある村で偶然に再会したのである。彼が首都から800キロメートルも離れた当時は電気も通っていない情報網の不十分な村にいたことを考えると、彼と人物が数年前にアジアのどこかで知り合い懇意にしていたという情報は非常に不確実なものであったかもしれない。しかも相手の住所などいつ変わっていてもおかしくない。しかし、実はその場所がソニンケの村であったということが、情報の信頼性を保障していたのだとのちにわかった。実際、筆者はその情報を頼りにバンコクへ行き、もっていた住所を頼りにアフリカ系移民が多い地区へタクシーを走らせ、そこでその人物を探した。案の定、住所は変わっていたが、半日後には本人から筆者の滞在先のホテルに電話があったのである。このように、ソニンケは異国でも民族ネットワークを介して助けられ、助け合いながら移動を経験しているのである。
 - 16) 抛出金を出してメンバーとなり、滞在者および故郷の家族に関する冠婚葬祭をはじめさまざまな問題に対して援助しあう。筆者がバンコクに滞在していたとき、あるソニンケの男性が病死した。遺体はできれば故郷へ送り返したいが、タイの法律においては遺体の輸送に多くの問題があり、結局、バンコクの墓地に埋葬することになった。これにともなう行政的な手続き、宗教上の儀式、費用の負担などを、同郷人会が中心になっておこなっていた。また日常の礼拝に関しても、共同で場所を借りイスラームの礼拝所を設けている。
 - 17) アフリカ諸国が独立した直後、旧ソ連政府はアフリカ人留学生を受け入れていた。冷戦時代に先立つ、旧ソ連による「親ソ連派」育成のための留学制度だったと思われる。
 - 18) 本稿を執筆した時点において、30人あまりのソニンケ移民が東京に滞在していることが筆者の調査からわかっている。彼らの多くは賃金労働者であり、本稿の趣旨であるアフリカとアジアをつなぐ独立した経済活動とは移動の質が異なる。そのことについては、今後、より詳細な調査をおこなったうえで報告したい。
 - 19) トーゴ、ベニン、ガーナ、コートジボアール、ギニアからは女性の商人も訪れる。そのほかにニジェール、カメルーン、ウガンダ、ケニア、タンザニア、スーダンなどの商人とも取引がある。ソニンケはナイジェリア人とは付き合いがないが、それはナイジェリア人がドラッグを扱っているからだという。アラブ系では、イエメン、サウジアラビア、パキスタンなど。
 - 20) セーファー・フラン (CFA.F.) はフランス・フラン (F.F.) に対し、50:1の固定レートから100:1に切り下げられた。
 - 21) 西アフリカ諸国におけるソニンケの人口は、20世紀初頭に25万人、植民地時代末期に36

万人と推定されている (Pollet et Winter 1971: 33)。植民地政府の記録によると、20世紀始め、セネガルには約3万人のソニンケが居住していた。一方、セネガルの1988年の国勢調査を参考に、2000年におけるセネガルでソニンケ語を第一言語とする人の数を推計すると14万人になる。このことから、セネガルにおいてソニンケの人口は1世紀のあいだにおよそ4.7倍に増加したと推計される。この数字を西アフリカ全体に単純に適用すると、今日のソニンケ人口は約118万人と推計される。しかしながら、これはソニンケの人口が1千万単位で数える規模ではないという程度の目安にすぎない。

- 22) カナダの移民は「家族結合」「独立移民」「ビジネス移民」の三種類に区別され、「独立移民」はポイント制で一定の能力をみたく移民をさす。「ビジネス移民」は資本をもっている移民で、起業や投資をするなどの条件がある (加藤 2001: 232-233)。筆者はそれらとはまったく異なる意味で、20世紀後半におけるソニンケの移動の特徴から、この時期のソニンケを「独立移民」と形容した。

文 献

- Adames, Adrian
1985 *La terre et les gens du fleuve*. Paris: L'Harmattan.
- Bathily, Abdoulaye
1989 *Les portes de l'or: Le royaume de Galam (Sénégal) de l'ère musulmane au temps de négriers (VIIIe-XVIIIe siècle)*. Paris: L'Harmattan.
- コーエン, ロビン
2001 『グローバル・ディアスポラ』 駒井洋監訳・角谷多佳子訳, 東京: 明石書店。
- Cordonnier, Rita
1987 *Femmes africaines et commerce: Les revendeuses de tissu de la ville de Lomé (Togo)*. Paris: L'Harmattan.
- Crousse, Bernard, Paul Mathieu et Sidy M. Seck (dir.)
1991 *Vallée du fleuve Sénégal: Évaluations et perspectives d'une décennie d'aménagements*. Paris: Karthala.
- David, Philippe
1980 *Navetanes: Histoire des migrants saisonniers de l'arachide en Sénégambie des origines à nos jours*. Dakar: NEA.
- Delafosse, Maurice
1912 *Haut-Sénégal-Niger (Soudan français)* 3 vol. Paris: Larose.
- Kane, F. et A. Lericollais
1975 *L'émigration en pays Soninké* (Cahiers de l'ORSTOM 7-2).
- 加藤 普章
2001 「カナダにおける国民概念と移民の受け入れ」NIRA・シティズンシップ研究会編著『多文化社会の選択「シティズンシップ」の視点から』pp. 225-237, 東京: 日本経済評論社。
- 井口 泰
1997 『国際的な人の移動と労働市場——経済のグローバル化の影響』 東京: 日本労働研究機構。
- Maiga, Mahamadou
1995 *Le bassin du fleuve Sénégal: De la traite négrière au développement sous-régional auto-centré*. Paris: L'Harmattan.
- Manchuelle, François
1997 *Willing Migrants: Soninke Labor Diasporas, 1848-1960*. Athens: Ohio University Press.
- 三島 禎子
1996 「ソニンケ社会における家族の連帯と規模——出稼ぎをめぐって」『国立民族学博物館研究報告』21(1): 77-118。
1997 「出稼ぎ労働者と地域社会——セネガル河上流域の変容」小倉充夫編『国際移動論——移民・移動の国際社会学』pp. 67-94, 東京: 三嶺書房。
2002 「国際移動と地域開発——ソニンケ移民に関する移動の主体性についての考察」小倉

三島 ソニンケにとってのディアスポラ

充夫・加納弘勝編『第三世界と国際社会』（シリーズ国際社会7），pp.195-221，東京：東京大学出版。

Monteil, Charles

1953 *La légende du Ouagadou et l'origine des Soninké, Mélanges ethnologiques* (Mémoires 23), pp. 359-408. Dakar: IFAN.

Salem-Murdock, Muneera et al.

1994 *Les barrages de la controverse: Le cas de la vallée du fleuve Sénégal*. Paris: L'Harmattan.

小川了

1998 『可能性としての国家史』 京都：世界思想社。

Pollet, Eric et Grace Winter

1971 *La société Soninké (Dyahunu, Mali)*. Bruxelles: Université Libre de Bruxelles.

Quiminal, Catherine

1991 *Gens d'ici, gens d'ailleurs*, Paris: Christian Bourgois Editeur.

ロドネー, W.

1978 『世界資本主義とアフリカ』 北沢正雄訳，東京：柘植書房。

戴エイカ

1999 『多文化主義とディアスポラ』 東京：明石書店。

武内進一

2001 『『紛争ダイヤモンド』問題の力学——グローバル・イシュー化と論議の欠落』『アフリカ研究』58: 41-58。

Timera, Mahamet

1996 *Soninké en France: D'une histoire à l'autre*. Paris: Karthala.

トッド, エマニュエル

1999 『移民の運命——同化か隔離か』 石崎晴己・東松秀雄訳，東京：藤原書店。

Weigel, Jean Yves

1982 *Migration et production domestique des Soninké du Sénégal*. Paris: ORSTOM.

World Bank

2002 Countries & Regions. April 26, 2002. <http://www.worldbank.or.jp/06group/RC_flame.htm>